

製本のススメ

Vol. 92

朝晩はかなり涼しくなってきましたね。そろそろ温泉が恋しい季節 焼き芋も栗ごはんも美味しく、今年も痩せる前に食欲の秋が来てしまいました。

今回は**糸と紙**の話し 1 (書籍用の背綴り)

秋になると何故か糸綴りの製本が増えてきます。みんな芸術に目覚めるのでしょうか？そもそも、和綴じも洋本も『綴じ』の基本は糸です。今では針金やホットメルトに取って代わられましたが、現在でも糸綴りは健在で 主に手帳や辞書の様に**開閉の頻度が多い物** 写真集の様に**喉下まで開いて見たい物** また長期保存のために**堅牢にしておきたい物**に多く使われます。糸の太さは0.1mm~0.3mm これを綴る冊子によって1本取~2本取で使い分けます。

さて綴りと言っても、布同様に糸で縫うわけですから、綴る部分が2枚以上はないと縫う意味がありません(8頁)つまり**ペラや4頁印刷だけでは綴りはできません。**

A4等の大きなサイズや頁数が多い冊子など設備によって16頁が印刷できない場合は特に紙厚を注意してください。あまり**厚い用紙では針が通らず、逆に薄い用紙では、糸の結び目が折丁の厚みより大きくなり 縫った後の製本が出来ません。**

結び目は糸の太さにも関係しますが**0.5ミリ程度**ですので、**例えば紙厚が0.1ミリでは4枚合わせても(8頁分)結び目の方が大きくなります。**つまり8頁では折丁の束厚が薄く綴りに不向きな用紙の厚みという事になります。

紙厚の上限界は約0.18ミリ程度でマットコートなら四六ベースで110k アート・コート紙なら135k 上質は135kでしょう。**この場合には16頁折ではなく、8頁折にしなくてはなりません。逆に薄さでは0.13ミリが限度でこれは16頁にしないとトラブルに繋がります。**マットコートなら四六ベースで73k アート・コートなら90k 上質では70kが大体の目安です。斤量の数字にまどわされず、厚みで用紙を決めて下さい。

では上質90kならどうでしょうか？この辺りはグレーゾーンで、8頁でも16頁でも可能ですが、全体の頁数(折丁数)によっては難しい場合がありますので、予め製本会社と相談した方が良いでしょう。



Teabreak

インスタント麺などに添えられた具材袋に「かやく」とひらがなで書かれています。漢字では「加薬」または「加役」と書きます。漢方で主薬に対し補助的に使う薬の意味ですが、そこから料理に使う薬味や香辛料を「かやく」と呼ぶようになったとか。そういえば関西方面では、五目飯の事を かやくご飯 と言いますね。

by (株) 井関製本